

電力土木の歴史－第2編 電力土木人物史（その8）

正会員 稲松技術センター 稲松敏夫 （技術士）

H I S T O R Y O F E L E C T R I C C I V I L E N G I N E E R I N G
－ P a r t 2 H I S T O R Y O F E L E C T R I C C I V I L E N G I N E E R .

b y T o s h i o I n a m a t s u .

概 要

筆者は先に第1回～第11回にわたって、電力土木の変遷と、電力土木に活躍した人々を中心に、各河川の水力開発について述べ、その中で電力土木に一生を捧げた人々のうちの代表的人物60名を発掘して、その成果をまとめ得た。さらに8年前からその中40名の人々の業績を詳述し、第2編電力土木人物史として31名（知久清之助、伊藤金二、北松友義、目黒雄平、高桑銅一郎、久保田豊、内海清温、熊川信之、岩本常次、吉田登、水越達雄、市浦繁、鶴飼孝造、和澤清吉、大林士一、金岩明、大橋康次、山本三男、味桂稔、中村光四郎、浅尾格、永田年、平井弥之助、野瀬正義、畑野正、田中治雄、石川栄次郎、藤本得、村田清逸、後藤壮介、泉悟策）について発表し、今回はその8として数名を発表する。（明治～昭和期、土木、開発した人）（1分類 人物史、2分類 河川、エネルギー）

（I）総括

第1編各河川水力開発の変遷には、11年間にわたり、日本全国及び世界大戦前の朝鮮、中国、台湾、東南アジア、世界大戦後の東南アジア、ブラジル等の開発変遷とその開発に一生を捧げた人物60名を発掘した。

第2編電力土木人物史は7年にわたり、その内31名分をまとめた。

今回はその8として引つづき数名分を調査、発表する。

(Ⅱ) 知り得た成果

(1) 電力土木100年の人の流れの変遷

(イ) 親分、子分時代から電力会社別地域別への流れ

(ロ) 企画、設計、施工管理電力会社直営から、企画、施工管理は電力会社直営、設計はコンサルタントへ委託に移行した。

(2) 親子二代の電力土木屋

①北松（東北電力）②伊藤（電源開発）③知久（東京電力）④山本（中国電力）⑤大西（日本発送電）⑥大橋（北海道電力）など親子二代の電力土木屋が多くいることを発見した。

(3) 水力、火力、原子力の変遷

特に100年の電力土木の中70年は水力時代（ダム全盛）70年から85年（15年間）は火力時代、85年から100年（15年間）は原子力時代となり、水力時代の土木屋の活躍の場はダム全盛時代でダムの各タイプの開発に各電力会社が技術を競ったが、火力、原子力時代となって耐震設計、基礎地盤、港湾、取放水、安全審査、環境調査と多元的に活躍の場が拡大した。

(4) 世界大戦前の北朝鮮、韓国、台湾、海南島、佛印への電力開発への国際的協力から大戦後の南米、東南アジア、ヨーロッパへの電力開発への国際的協力へと展開が拡大していった。

(Ⅲ) 人物史（各論）

(1) 田代 信雄



(イ) はじめに

本稿をまとめるにあたり、九州電力(株)溝辺哲水力開発課長、田代信雄氏、甥の田代襄二氏から「電力土木人物銘々伝（九州電力）」等、資料、写真を送っていただき田代信雄の略歴、業績と人となりを知り得た。筆者は昭和50年九州電力副社長の田代信雄氏をお尋ねし、当時纏めた電力土木の歴史、第1部各河川水力開発の変遷—九州地方—の資料等についていろいろ御高説をお聞きした事を心から感謝している。

田代信雄氏は87才で福岡市で御令室温子さんとお元気である由、甥の田代襄二氏からお聞きしており、資料、写真等お送りいただき心から感謝申し上げます。

(ロ) 田代信雄の年譜

明治45年 1 月 福岡県に出生
昭和11年 3 月 東京大学土木工学科卒業
昭和11年 4 月 東邦電力(株)入社
同社白川発電所建設所

昭和14年 1月 同社下原発電所建設所
 昭和14年 5月 日本発送電(株)引継入社
 昭和20年 4月 日本発送電工事課長
 昭和26年 2月 同社九州支店土木部次長
 昭和26年 5月 九州電力(株)引継入社
 土木部工事課長
 昭和30年 7月 土木部次長
 昭和33年 5月 理事土木部長
 昭和35年 4月 一ツ瀬発電所所長兼務
 昭和38年 5月 取締役一ツ瀬発電所所長
 昭和43年 5月 常務取締役
 昭和49年 5月 代表取締役副社長
 昭和52年 6月 九州電力(株)退社
 昭和52年 7月 西日本技術開発社長
 平成2年 7月 退社

48年 工学博士「マスコンクリートの長期的
 諸性状に関する研究」

49年 藍綬褒章受章

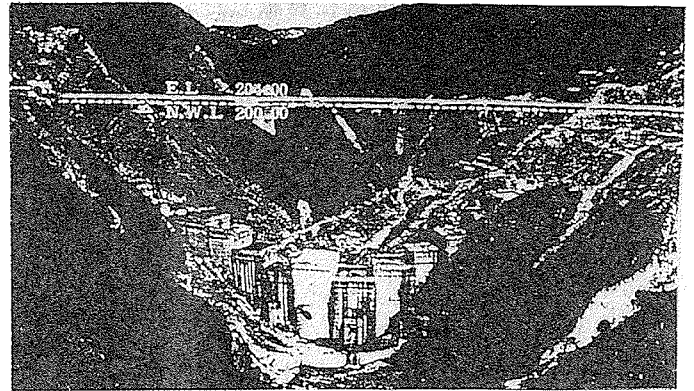
57年 勲三等旭日章受賞

現在87才 福岡市に居住

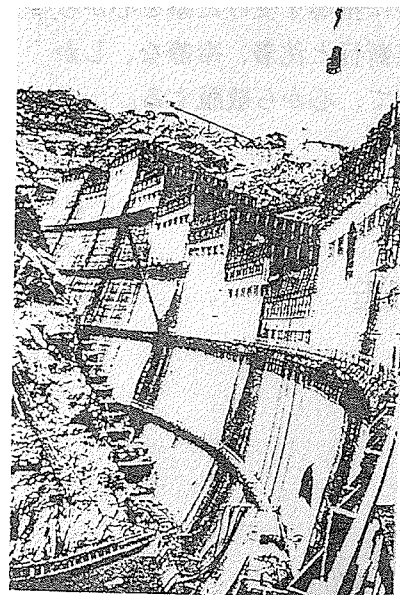
(ハ) 業績と人となり

昭和11年2・26事件の年に東邦電力に入社。14年日本発送電の設立と同時に本社に勤務し、中国、四国及び九州地区の水力計画を立案、推進した。終戦の年に九州支店土木部工事課長に着任し、熊川信之のもとで水力開発を担当した。26年九州電力設立後は、土木部工事課長、次長を歴任し、戦後の電力需要が極度にひつ迫した苦難の時期に水力電源の開発に敏腕をふるった。特に、我が国最初の上椎葉アーチダムの建設には当初から参画し、TVAほか米国のダム工事の機械化等を調査するなど、その完成に著しく、貢献した。

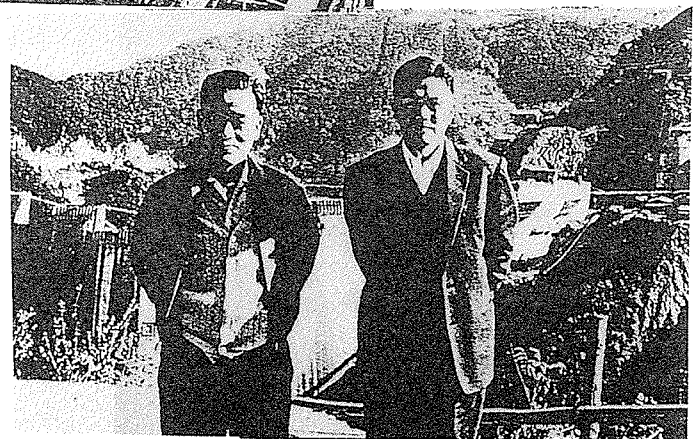
昭和31年土木部長就任後は、九電土木陣の総責任者として、約20年間、水力はもとより、火力、原子力の電源開発を推進した。なかでも当時西日本最大といわれた一ツ瀬発電所（180MW）の建設には、自ら建設所長として陣頭指揮をとり、安全性と経済性を追求した薄いドーム状のアーチダム（高さ130m）を完成した。その他諸



建設中の一川瀬ダム



昭和37年 5月
 高さ130mの薄い
 ドーム状の
 アーチダム



塚の中空式電力ダム、大手の超高張力鋼を使用した水圧・鉄管等新しい技術を進んで取り入れた。性格は自ら持すること厳にして、決断力に富み、常に沉着冷静に土木技術陣を統率指導し、部下の信頼は、絶大なものがあった。

昭和43年に常務に就任し、土木以外の部門も管掌、49年に副社長に昇進、同時に立地環境本部

長として石油代替エネルギー電源の立地開発を推進し、電力の安定供給に貢献した。昭和52年副社長退任後は、建設コンサルタントの西日本技術開発の社長に就任した。62年社長を退任した後は相談役として深い学識と豊富な経験をもとに後進の指導に当たっている。

(二) 私の田代信雄観

上椎業、一ツ瀬のアーチ、ダムの建設への中核としての活躍と、水力、火力、原子力さらに建設コンサル西日本技術開発の設立へ努力と、同じ電力土木の道を一筋に歩んで来た筆者の先達として、直接、間接に指導を受けた事を心から感謝する。特に熟慮断行と沈着、冷静な、しかも暖い人間味について、心から敬服する。

(2) 吉田 栄延



(イ) はじめに

吉田栄延氏は現在84才、仙台市で元気に過されている。氏から「私と電力人生」と書き送っていただいたのと、東北電力(株)取締役土木建築部長多田省一郎氏から「電力土木人物銘々伝」(東北電力)及び写真を送っていただき、吉田栄延の略歴、業績と人となりを掴み得た。心から感謝申し上げます。

(ロ) 吉田栄延の年譜

大正3年10月19日 福島県に出生
昭和13年3月 東京大学土木工学科卒業
昭和13年4月 東北振興電力(株)入社
昭和16年12月 日本発送電(株)引継入社
昭和19年4月 応召入隊(応召中休職)
昭和22年7月 兵役より復員
昭和22年7月 日本発送電(株)土木部
水路課改良係長
昭和26年5月 東北電力(株)引継入社
昭和40年5月 東北電力取締役就任
昭和45年5月 東北電力常任監査役就任
昭和49年6月 (株)橋本店入社
昭和56年1月 (株)橋本店代表取締役社長
昭和60年4月 (株)橋本店代表取締役会長
昭和62年1月 (株)橋本店取締役常任相談役
現在に至る。
昭和33年9月 世界大ダム会議に出席の後
電源開発工事視察の為、
アメリカ、ヨーロッパ
各国に出張、同年11月帰国

(ハ) 業績と人となり

昭和13年東北振興電力入社。子吉川筋郷内の建設に従事した。当時の学卒の常として、サージングの計算を担当し、ガバナー、テストの時は、責任上、サージタンクの内壁に張付いての実測を命じられて実地の仕事の重みを体験したと言う。日発への承継により本店建設局に在勤中召集され、昭和22年復員、沢田俊郎水路課長のもとで改良係長として、山口直樹保守係長、高畑克己らと共に、戦後の荒廃した全国の水力設備の改良、保修の総合調査を行った。その見積で

は、時価で40－50億円に上る膨大なものであったと言う。東北電力への承継後只見川第1陣に加わって庁門土木課長を務めた。これが完成し、本店土木建設課長として3年間の勤務の後、上野尻建設所長として、庁門コンクリート、ケーシングの体験を完成させた。この完成寸前に只見川33年災として著名な記録的大出水に襲われ、発電所が一時、水中に孤立する状態となったが、事なきを得たのも細心緻密な配慮の賜であった。

昭和34年水力建設部次長から35年土木部長として保守部門の経験を生かすこと3年、平井寛一郎社長の信任を受けて、土木陣から初の秋田支店長に任命され、40年取締役福島支店長を委嘱された。松田部長急逝に際し、43年再度土木部長の委嘱を受け、44年の只見川大出水が河川洪水対策等問題として取り上げられた事の処理にあたった。

よくよく出水に縁のある経歴であるがその特に適材が配置されていたことは天の配材でもあろう。その後常任監査役を経て49年5月退任し、仙台の建設業の老舗橋本店に副社長として推薦され、社長、会長を経て、現在は相談役として仙台財界活動に力を注いでいる。仙台中法人会々長、仙台ライオンズクラブ会長、その他公職を多く委嘱されているのも、円満にして緻密誠実な人柄による。

(二)「私と電力人生」吉田栄延

1、私の誕生の地は福島県いわき市である。

当時、まだいわき市は平町といった時代で、私はその隣村下小川村の庁田舎、酒造業の実家で呱呱の声をあげた。まだ小学校のころは筒振和服で、近所の腕白小僧と共に田畑の作業道など悪戯鬼達と馳せ競っていた。中学校は平町にあった磐城中学、高等学校は仙台市にある第二高等学校、当時名物教師として栗野健次郎、そして土井晩翠の警咳に接することが出来たのは忘れ得ぬ多感の頃の思い出である。

2、東大土木工学科を卒業すると、不況、貧困のさなかの東北の地に身を挺し東京開発のさきがけとしての東北振興電力(株)にて水力発電開発

に従事、ついで日本発送電(株)統合となるまで数年の間に発電、変電、送電等にて見ちがえる開発をみることとなった。

3、対外的に戦雲ただならぬ中、昭和19年4月30才の年令をこえて若年の現役初年兵達と朝鮮会寧の地に軍務(工兵隊)に、そして中支の野に派遣される。豆満江を渡り、満州国に入り、新京(長春)をへて鉄路にて南下、揚子江沿岸へ。混濁の大河、揚子江を渡り、対岸の南京へ。休養駐屯の後、体力回復した部隊は敵機の襲撃を避けながら、大河を江上輸送船で遡る。船内はむし風呂の如く、夜風の涼を求めて、禁断の甲板上に身をおき転落して江上にはまり、生命をおとす者も続出した。やがて武漢三鎮の一要衝たる武昌上陸、郊外の営舎で、装備、食糧等確保にて一ヵ月を過ごす。

4、同年9月半ば愈々前線へ出発、一兵卒たる小生、当時巷間を賑がしていた火野葦平氏の小説「土と兵隊」よろしく赫土の道路の行軍であった。やがて不幸にも『マラリヤ』羅患、長沙の地にある野戦病室に入院のやむなきに至った。そして終戦を迎える。昭和21年7月上海から軍用船で内地に向かう。上陸は山口県仙崎港であった。復員式は同町の小学校で行われた。民間人になり、支給された金子で購買に及び、物価の変動の著しさにあらためて驚きを感じた。

5、東京水道橋界隈の日本発送電の会社、給電所だった鉄筋コンクリート造の建物と他のバラック社屋等あわれな姿であった。私は土木部水路課配属となり、既設水力発電所の修繕、改良の仕事に従事することとなる。戦禍による火力発電所対策とともに、酷使してきた水力発電所の修繕、改良の為、現況調査の上、当時、G.H.Qに拝み倒して特別修繕、特別改良の推進に資金を得て対応していった。

6、昭和26年電力界は、G.H.Qによる再編成が行われることになった。全国9電力の誕生である。ここで私は出身地のある東北電力に身を委ねる。復員時「帰りなんいざ、田園正に荒れんとす!」の思いの中で、地域開発に挺身することになった。

7、只見川、阿賀野川の一貫開発について
港間日毎夜毎の民間、工場の停電の中にあつては、一日も早い電力供給の必要が要求されていた。当時東北に戻った土木関連の主要技術陣は、平井弥之助氏を始めとして、北松友義、矢崎道美、後藤壮介、吉田勝美そして小生の面々であつた。

8、やがて只見川筋はアメリカよりの、G.H.Qの協力を得て、着々開発が進められ、旧来の諸発電所の改修、拡充のもと、現在のような電源が確保されることになり、更に大火力、原子力発電時代に入って来たわけである。今や太陽光発電、風力、汐力発電が検討されることにより、増大する需要に応ずるべく、電源の多様化が更に進められつつある時代に突入して来ている。

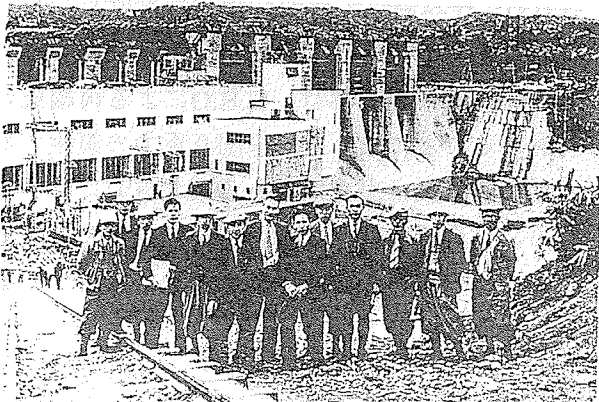
9、私も昭和45年、技術者として身を委ねて来た東北電力を退き、民間の建設会社に入社して、現地に到り、別途地域の各種団体との協力の中で所謂世の為人の為の生き方を進めている。

10、寅年生れの頑固さの中で「何を！」との思ひを胸に秘めて、一日一日をすごして居る現在である。

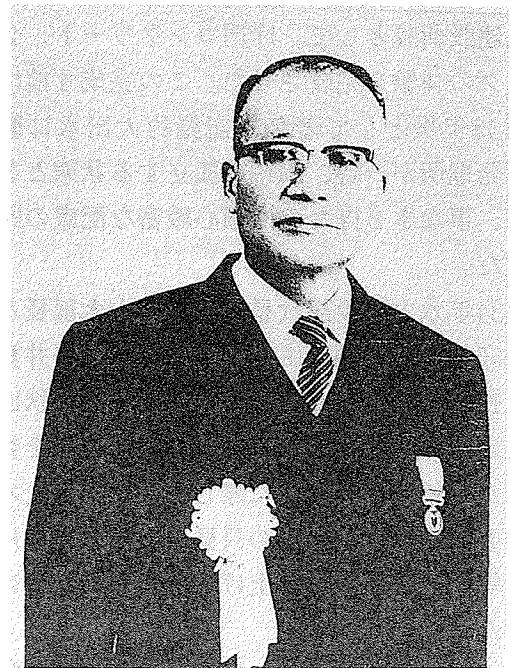
11、10年ばかり前、家族共々、所謂電源開発の現状を認識させるべく、只見川、阿賀野川筋の地域と主要発電所を訪問させた。そして所謂土木技術者として発電施設と共に歩んだドラマを顧りみつつ工作物を思わず觸れていとおしさを感受させられるひとときをすごしたものである。

(ホ) 私の吉田栄延観

日本発送電水路課改良係長吉田栄延時代から現在迄直接、間接に御指導をうけた事を心から感謝申し上げます。円満にして緻密、誠実な人柄には、かねがね見習いたいと心掛けています。



(3) 原文太郎



(イ) はじめに

本稿をまとめるにあたり、中国電力(株)土木部長山本健氏、御令室原幸子さんから「電力土木人物銘々伝(中国電力)等資料、写真を送っていただき原文太郎の略歴、業績と人となり」を掴み得た。心から感謝申し上げます。

(ロ) 原文太郎の年譜

昭和44年11月	兵庫県に出生
昭和8年3月	金沢高等工業学校土木工学科卒業
昭和8年4月	広島電気(株)入社
昭和14年7月	日本発送電(株)へ引継入社 中国水力事務所土木課
昭和15年5月	神野瀬水力発電所建設所土木課
昭和18年10月	神野瀬水力発電所建設所 第二工区主任
昭和18年10月	神野瀬水力発電所建設所土木係長
昭和20年4月	中国支店神野瀬水力発電所 建設所土木課長
昭和21年5月	中国支店神野瀬水力発電所 建設所長兼土木課長
昭和22年10月	中国支店土木部工事課工事係長

昭和26年 5 月 中国電力(株)に引継入社
土木部土木工事課長兼工事係長

昭和26年10月 明塚水力発電所建設所長

昭和29年 1 月 潮水力の発電所建設所長
兼明塚水力発電所建設所長

昭和31年 5 月 柴木川水力発電所建設所長
兼潮水力発電所建設所長

昭和33年 2 月 新聞野平水力発電所建設
所長兼柴木川水力発電所建設所長

昭和34年 3 月 兼太田川水力発電所建設所長

昭和35年 1 月 太田川水力発電所建設所長
兼新聞野平水力発電所建設所長

昭和35年 2 月 土木部次長兼、新聞野平水力
発電所建設所長

昭和38年 2 月 兼新成羽川水力発電所建設所長

昭和39年 5 月 新成羽川水力発電所建設所長
土木部長待遇

昭和41年12月 理事

昭和44年 5 月 中国電力(株)退社
その後中国高圧コンクリート(株)
専務取締役、
松本建設(株)専務取締役等を歴任

昭和45年 黄綬褒章受章

平成 2 年 5 月25日 逝去 (80才)

(ハ) 業績と人となり

昭和26年 5 月中国電力へ移り、神野瀬、明塚潮、柴木川第一、柴木川第二、新聞野平発電所等の建設所長を歴任。昭和35年 2 月土木部次長、昭和38年 2 月新成羽川発電所建設所長に就任し、中国電力初の揚水式発電所建設の指揮を取る。昭和44年 5 月中国電力(株)を退任。その後中国高圧、コンクリート(株)専務取締役、松本建設(株)専務取締役等を歴任。

(ニ) 私の原文太郎観

筆者の金沢高等工業学校の9年先輩として、日本発送電、中国電力先代、直接間接に指導をうけた。

心から感謝する。

特に平成元年10月筆者が電力土木の歴史第一部、－中国地方の河川開発の変遷－を取り纏め

る際、広島のお宅を訪問し、電力土木開発の経緯や、各歴任された電力土木の一生の経験談等御夫妻ともども、よく話していただき、多くの資料をお借りして、取り纏めることが出来た。その時の相当の年配にもかかわらず、お元気で斗志満々のお姿を拝見し、さすがに電力土木に一生を賭けた偉大な先輩だと心を打たれた事を今思い返している。

有難うございました。心からお礼申し上げます。

(4) 山家 義雄



(イ) はじめに

本稿をまとめるにあたり、東北電力(株)取締役土木建築部長多田省一郎氏、山家義雄の御令息山家真氏から「電力土木人物銘々伝 (東北電力)」等、資料、写真を送っていただき、山家義雄の略歴、業績と人となりを掘り得た。心から感謝申し上げます。

(ロ) 山家義雄の年譜

大正10年 9月13日 台湾に出生
昭和18年 9月 九州大学土木工学科卒業
昭和20年 宮城県へ引揚げ
昭和22年10月 東北配電(株)入社
昭和41年 2月 東北電力(株)土木部次長
昭和45年 7月 〃 土木部長
昭和49年 5月 〃 理事土木部長
昭和50年 5月 〃 取締役土木部長
昭和54年 6月 〃 常務取締役
昭和54年 7月 〃 常務取締役
電源開発推進本部
副本部長
(水力発電担当)
昭和56年 6月 東北電力(株)常務取締役
退任
東北ポール社長
つづいて会長
昭和59年 6月 東北電気保安協会理事長
平成 5年12月 8日 逝去 (71才)

(ハ) 業績と人となり

昭和22年東北配電入社、工務部土建課に配属され、鳴子、鬼首発電所の水害復旧等に従事、昭和26年東北電力に承継され、土木部水路課から昭和28年法量建設所工区主任を務めて、水路課に戻り、支店土木課長を歴任の後、昭和40年土木部土木課長、土木部次長として松田義久部長、吉田栄廷部長を補佐した。この間電力会社における土木部の在り方も、建設一辺倒から大きく変る過渡期に当たり、加えて河川水害と発電所の関係が社会問題化する等、急速な電源拡充ののち運転に入ってから派生した諸問題について、地道な粘り強い対策を必要とする状況下に保守の経験を生かし、その任を果たした。昭和45年吉田部長のその後を承けて、土木部長に就任。昭和49年理事、昭和50年取締役に任ぜられ、昭和54年常務取締役に任ぜられるまでの9年間土木部長の職に在った。とくに只見川ダム群の出水時運用操作対策の問題について同氏は「国、県の管理施設の充実と、これを越える範囲での電力側の地元協力」の方

針を立て、各方面と折衝し、今日の対制を導いた。

加えて水力開発の困難な時代において、松田部長の遺志を継いで、後藤、吉田両部長を経て、只見、阿賀野川筋の増設3ヶ地点の完成と第2沼沢揚水を着工した。

更には、特定多目的ダム参加(新大川、浅瀬石川、本道寺、新水ヶ瀬、等)その他の地点が実現をみており、これには経済合理性の認識で、社内の合意を得るのに、地道な同氏の説得力がものを言った。

昭和56年常務を退任して、東北ポール社長、会長を務めた後、昭和59年東北電気保安協会理事長をつとめた。

仕事は部下に委ね黙って責任を取る幅の広い大人の風格が業界の発展に貢献している。

(二) 私の山家義雄観

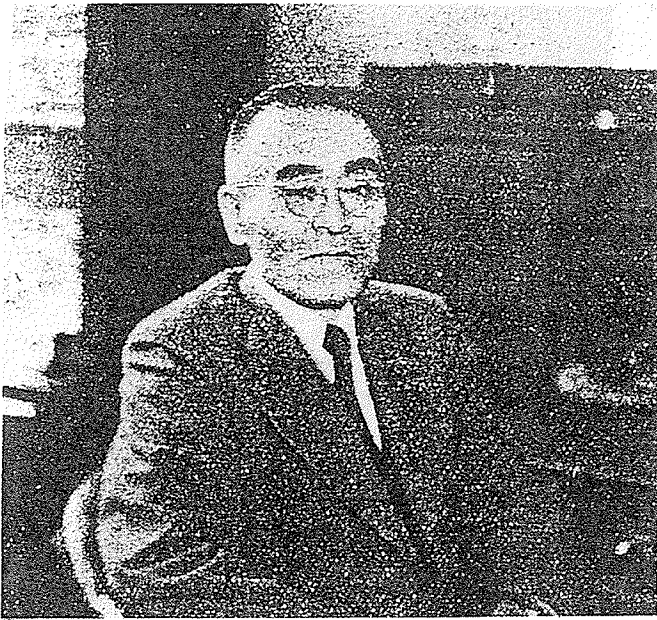
筆者と同じ年代に、東北電力(株)の幹部として、電力土木の道を貫き通した山家義雄の業績と人間性を直接間接に行を共にした会議等を思い起し乍ら、誠実な、幅の広い大人の風格、風貌が今筆者の顔前にある。

特にダム操作規定、河川管理要綱等の策定や、土木業務の転換等への検討打合せ等における山家義雄の先見性、積極性についての発言、行動については、全く頭が下がる思いである。

長い間のおつきあいと御指導に心から感謝する。



(5) 大西 英一



初代発電水力会長時代

(イ) はじめに

本稿をまとめるにあたり、中部電力(株)取締役土木建築部長宮口友延氏から「発電水力、大西さんを偲ぶ会」「初代発電水力会長大西英一の創刊に当り」等送っていただいた資料と、電力中央研究所長江刺靖行氏からの「初代電力技術研究所理事長の大西英一」及び「土木学会、千秋信一（電力中央研究所）の大西英一」の写真、資料により大西英一の略歴、業績と人となりをつまみ得た。

心から感謝申し上げる。

筆者が日本発送電北陸水力事務所（富山市）へ入社した当時、大西英一は、日本発送電(株)に昭和17年から昭和25年まで理事、総裁として活躍した時代で、直接、間接に御指導をいただいた。

(ロ) 大西英一の年譜

明治22年12月7日 福井県に出生
 明治45年3月 名古屋高等工業学校土木科卒業
 明治45年4月 鉄道院に入省
 大正3年4月 神通川電力会社に入社
 神通川建設所長として完成
 昭和6年4月 矢作水力(株)入社
 中部地区の電源開発に従事

昭和14年4月 矢作水力(株)取締役
 昭和17年4月 日本発送電(株)入社
 水路部長
 昭和19年4月 日本発送電(株)理事
 土木部長
 昭和22年6月 日本発送電(株)総裁
 昭和25年9月 日本発送電(株)総裁辞任
 昭和26年11月 電力技術研究所
 理事長（初代）兼日本大学教授
 昭和28年4月 電力中央研究所理事長代理
 昭和30年12月16日 逝去
 （現職のまま）
 藍綬褒章受賞
 工学博士 勲四等



電力技術研究所理事長（初代）時代
 （昭和26年11月）

(ハ) 業績と人となり

生涯を通して終始電気事業に身を置きわが国の発電水力開発の先駆的役割を果たした。すなわち神通電力、矢作水力時代に約15万kw、日本発送電に転じて土木技術の最高責任者として、あるいは総裁として、約37万kw、合計52万kwの水力開発を達成した。

特に昭和17年以降の戦中、戦後におけるわが国未曾有の経済の混乱期に際して極度に窮迫した資材、資金を克服して、この大事業を成し遂げ

たことは、その指導力企画力、新技術の考案と採用による技術力等、その卓越した手腕によるところがきわめて大きい。とりわけ戦後、その頂点に達した労働問題を適切に処理しながら、戦後の疲弊した電源を急速に復活させ、急増する電力需要にもかかわらず、電力邁迫を最小限にとどめ、戦後の日本経済復興の礎を築いたことは、その経営者としての手腕に加えて、高邁な人格と、滋味豊かな人間性によるものにほかならない。また戦争によるわが国水力技術の遅れを取り戻すため、米国の海外技術調査団を招聘し、大規模水力開発の調査立案を委嘱し、その後続く、佐久間、奥只見、田子倉等の大開発の緒をつくった功績も、また特筆される。日本発送電総裁辞任後は、電力中央研究所の初代理事長として、電気事業の総合研究機関を育成し、技術の改善と、向上に尽力した。さらに、国際大ダム会議加入を主唱しその国内委員会初代会長として、わが国大ダム技術の発展に貢献した。

優れた経営者であると同時に先進的、土木技術者として、その生涯を電気事業に捧げた大西英一を終始支えたものはその「人を慈しむ心」であって、まさに「人間大西英一」として、いまなお敬慕されるゆえんである。

(二) 私の英一観

人間性と指導力、先見性と直接、間接的に指導を受けた電力界の大先達に頭が下がる。

日本発送電時代、電力中央研究所時代と、直接、間接に指導を受けた筆者は、大西英一の人間の大きさ、偉大なる先達として現在も尊敬しているが、特に富山県に加藤金次郎の大牧発電所訴訟問題について筆者が技術担当として解明に努力した際の英一の御指導について改めて今思い起している。

(6) 矢崎 道美



昭和41年黄綬褒章をいただいた時

(イ) はじめに

本稿をまとめるにあたり、矢崎道美の御令息矢崎武氏、東北電力(株)取締役土木建築部長多田省一郎氏から「電力土木人物銘々伝―東北電力」等資料、写真等送っていただき、矢崎道美の略歴、業績と人となりを知り得た。

心から感謝申し上げる。

筆者が昭和17年10月日本発送電(株)北陸水力事務所(富山)に入社した当時、矢崎道美は日本発送電(株)建設部に在職され、再来東北電力に於て、平井―矢崎の名コンビ時代を含めて、直接、間接に大変お世話になった。

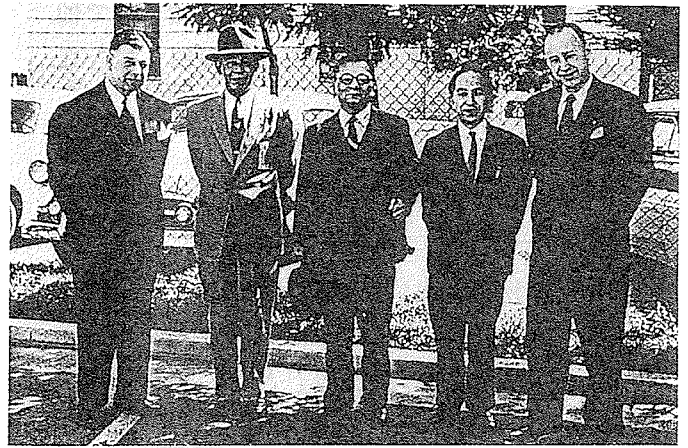


昭和30年 大ダム会議 (サンフランシスコ) へ

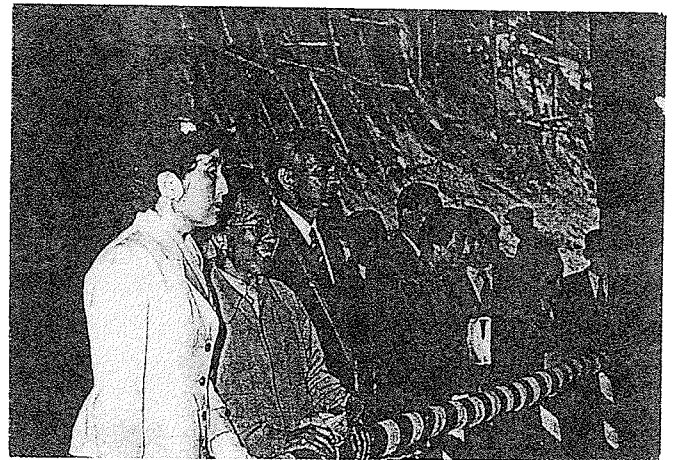
(ロ) 矢崎道美の年譜

明治40年12月 9 日 山梨県に出生
 昭和 8 年 3 月 京都大学土木工学科卒業
 昭和 8 年 4 月 広島電気(株)入社
 昭和14年 7 月 日本発送電(株)建設部
 土木設計課勤務
 昭和20年11月 日本発送電(株)東北支店
 宮下水力発電所建設所長
 昭和22年 7 月 日本発送電(株)
 土木部計画課長
 昭和26年 5 月 東北電力(株)建設局
 土木建設部次長兼土木計画課長
 昭和26年11月 東北電力(株)
 土木建設部長心得兼土木工事課長
 昭和29年 5 月 東北電力(株)建設局建設課長
 昭和35年 5 月 東北電力(株)取締役就任
 建設局長兼水力建設部長を
 委嘱される
 昭和40年 5 月 東北電力(株)取締役
 兼東北ボール(株)
 代表取締役社長に就任
 昭和41年 6 月 東北電力(株)取締役退任
 東北ボール(株)代表取締役社長、
 会長を歴任
 昭和59年 逝去(77才)

就中、只見川問題酣の頃は東西奔走、鈍急行の東北本線に乗る時間も無駄に出来ず、夜行寝台の連続で、体調を損ぜられたと聞く。



昭和30年 大ダム会議(サンフランシスコ)にて



昭和29年 本名ダム所湛水式
 (秩父宮妃殿下、白州会長等)に同行)

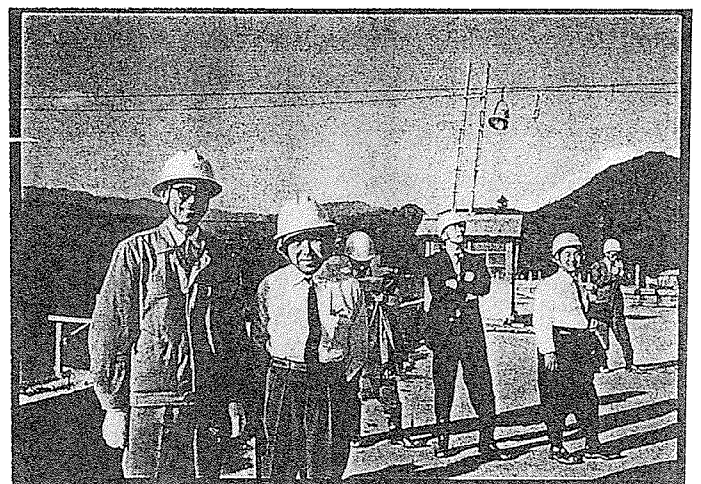
(ハ) 業績と人となり

昭和14年日本発送電に承継され、本店と中国建設事務所(右田水力)に従事の後終戦後東北支店宮下水力建設所長として始めて東北に縁を持った。

此の時代は電産華やかなりし頃で特管職は所長のみ、赤旗を持った組合員が日夜圧力を掛け、頼るは家族だけと言った中を頑張り抜いたと述懐している。

まさに外柔内剛の手本である矢崎氏が、後年の平井-矢崎の名コンビを成したのも宜なる哉である。

その後本店計画課長、工事課長の特に東北電力に迎えられ、建設部長として只見川開発を始め、各地方で進められた水力開発の指導に当たった。



昭和38年

一段落した昭和30年には外遊第1号として館内三郎技術局長と共に、欧州を歴訪し、アルプス山麓Lech河のチューブラ、タービンの資料を始め、多数の資料を持返った。

これが、わが国のチューブラ水車の始まりで仙台郊外人来田（1,200kw）がその実現第1号となった。

昭和35年取締役建設局長に任ぜられ、昭和41年退任、東北ポールの社長、会長として地方振興に盡力された。

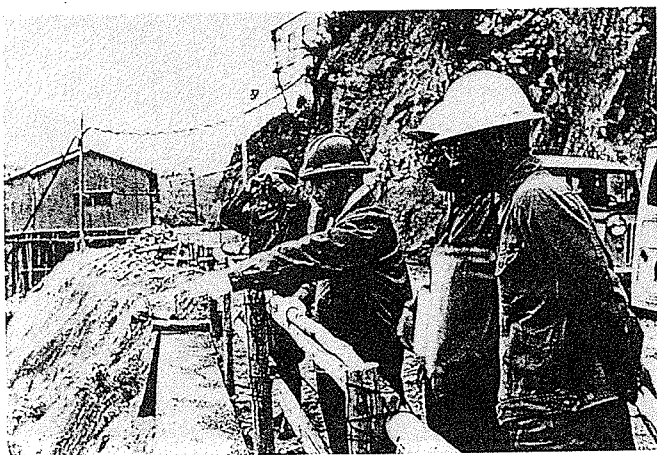
昭和59年物故されたが地方自治体の首脳部は「平井さんとは喧嘩になるが矢崎さんが来るとOKしない訳には行かない」とその徳を偲ぶ人は多い。

矢崎道美は菅原道明爺の甥にあたるとの事であり、電気とは切っても切れない血の流れが感ぜられるが、爺からの感化については、故人となられた今では確かめられる由もない。

菅原道明爺は、菅原道眞の末孫で、長崎県出身、明治15年福島新聞を創刊したのが縁で、かねて興味を持っていた水力事業を福島で興すこととなったのが明治28年完成の庭坂発電所（100kw）である。

(二) 私の矢崎道美観

筆者が日本発送電入社以来平井―矢崎の名コンビ時代を含めて、外柔内剛の矢崎道美に直接、間接に指導をうけたその人柄と先明性に多大の感銘を受けた事を心から感謝する。



昭和38年



昭和38年 加治川発電所工事

(Ⅳ) 終りに

以上前回迄31名、今回6名合計37名分をまとめ得たが、今後引つづきまとめてゆきたいと考えている。

本稿を取り纏めるにあたり、御家族、電力会社各社等の多大な御支援をいただき、重点、履歴書、業績、人となり等に関する資料の提供をうけた事について、心から感謝申し上げます。

(以上)